

北海道教育大学附属図書館

ISSN 1344-5081

図書館報

86号

平成23年3月28日発行

- 02 活性化プロジェクト報告
第3回附属図書館懸賞論文
学生選書ツアー
読書指導の達人講座
ブックカフェ in ASAHIKAWA
- 20 利用者アンケート結果速報
- 21 図書館職員雑感
- 22 教職員著作物受贈一覧
- 24 附属図書館からのお知らせ



図書館活性化 プロジェクト

平成22年度活動について

図書館活性化プロジェクトについて

平成20年度から「図書館を元気に」という目的で開始され、この度3年目を迎えました。初年度から実施している「北海道教育大学附属図書館懸賞論文」及び「学生選書ツアー」に加え、今年度は新規事業として「読書指導の達人講座」「ブック・カフェ in ASAHIKAWA」を開催して新たな学生参加事業を試みました。今後も多くの学生に参加してもらうことを目標に、様々な内容で展開していきたいと考えております。

平成22年度図書館活性化プロジェクト一覧

第3回附属図書館懸賞論文（附属図書館）
学生自身による読書意欲・思考・表現の涵養
（応募数18編）
平成22年10月～平成23年1月

学生による選書ツアー（札幌館・釧路館）
学生主体の図書選書のための書店ツアー
（8回実施・参加人数53人）
平成22年11月

読書指導の達人講座（札幌館）
学校図書館の利用方法、ブックトーク、アニメーション及びストーリーテリング等の読書指導の実践内容のワークショップを計4回実施（延べ参加人数約60人）
平成22年11月～平成22年12月

ブック・カフェ in ASAHIKAWA（旭川館）
学生ホールのフリースペースを利用して、カフェ形式で気軽に本に親しめるイベントを計2回実施（延べ参加人数約50人）
平成22年11月、平成23年2月

第3回北海道教育大学附属図書館懸賞論文

審査結果は次のとおりです。

【優秀賞】

小論文部門

原田 香里（札幌校4年）

「歌舞伎演目『若緑勢曾我』〈外郎売〉の口上にみられる妙薬「外郎一透頂香」はどんな薬か」

感想文部門

薦田 侑奈（札幌校4年）

「子どもの本質をとらえ荒れを変えていく力を求めて～「荒れる」子どもたちに教えられたことを読んで～」

【佳作】

小論文部門

井上 晋（釧路校4年）

「大江健三郎初期作品における「弟」の影響」

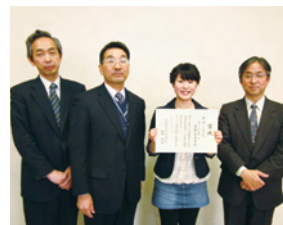
感想文部門

菅原 智奈美（函館校1年）

「明日に向かうために」

杉山 亜里紗（釧路校1年）

「本との出会い、赤尾先生との出会い」



表彰式記念写真
札幌／釧路／
函館

小論文部門 優秀賞

歌舞伎演目『若^{わか}緑^{みどり}勢^{いき}曾^{おい}我^そ』〈外郎売〉の口上にみられる
妙薬「外郎—透頂香^{ういろう とおちんこう}」はどんな薬か

原田 香里

俳優やアナウンサーが、はっきりと滑らかにセリフを発音するための滑舌練習として用いる稽古本の中に、〈外郎売^{ういろうり}〉という口上がある。私は図書館でこの〈外郎売〉に出会い、最初のうちはそれが歌舞伎の演目の中の口上からの出典であるとは知らず、作品の半分以上を占める早口言葉に興味をもって何度も何度も読み返していた。

〈外郎売〉は、商人欄干橋虎屋藤右衛門（剃髪して円斎と名乗る）が、中国伝来の妙薬「外郎—透頂香」の由来や効能を早口で淀みなく述べ立てて客を引こうとするという内容のものである。欄干橋虎屋藤右衛門は先ず自己紹介をして丁寧に自分の身元を証明し、これから売ろうとしている妙薬「外郎—透頂香」の由緒を説き、その効き目を述べる。また、その効能を証明するために客の前で自らその薬を一粒飲んで見せ、長い長い早口言葉も淀むことなく口を滑り出すほど元気が漲ることを、自ら証明するのである。この口上〈外郎売〉の中で、欄干橋虎屋藤右衛門は妙薬「外郎—透頂香」を以下のように紹介する。

元朝より大晦日まで、お手に入れますこの薬は、昔、陳の国の唐人、外郎という人わが朝へ来たり、帝に参内の折から、此の薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取り出だす。依ってその名を帝より「頂透香」と賜る。即ち文字には。「頂^{もんじ}き、透^{いた}く、香^{すく}」と書いて、「とうちんこう」と申す。……お上りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八つ棟、おもてが三つ棟玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あつて、系図正しき薬でござる。……さらば一粒食べかけて、其の気味合いをお目にかけましょう。先づ此の薬を、かように一粒舌の上にのせまして、腹内へ納めますると、イヤどうも言えぬは、胃、心、肺、肝がすこやかに成って、薫風^{くんふう}喉より来たり、口中微涼を生ずるが如し、魚鳥、さのこ、麺類の喰い合わせ、其の外、万病即効あること神の如し。さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわることが銭ごまがはだして逃げる。ひょっと舌が廻り出すと、矢も楯もたまらぬじゃ。そりゃそりゃそらそりゃ、まわってきたは、廻ってくるは……早天そうそう、相州小田原透頂香。隠れござらぬ、貴賤群衆の花のお江戸の花ういろう。……産子、這う子に至るまで、このういろうの御評判……

今日おいでの何れも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引っぱり、東方世界の薬の元締、薬師如来も上覧あれと、ホホ、敬って、ういろうはいらっしゃりませぬか。（『ことばの国 〈外郎売〉』より）

欄干橋虎屋藤右衛門によれば、妙薬「外郎—透頂香」は飲めばたちまち五臓六腑が健康になり、口には清涼感が漂い、どんな病気に不すぐ利ののだという。そんな夢のような薬が存在するのだろうか。私は最初、〈外郎売〉は口の上手い商人が、万能薬と称した偽薬「外郎—透頂香」をあの手この手で売りつける江戸時代の悪徳商法の話なのだろうと思っていた。しかし、もし本当に実在したなら凄い薬だ。

外郎と聞いて最初に思い浮かんだのは、米の粉に水や砂糖を加えて蒸して作る四角くて甘い、あの菓子の外郎だ。だが〈外郎売〉の文中に「一粒食べかけ」とあるからには丸薬と考えるのが普通である。お菓子の外郎と薬の外郎は違うのだろうか。この問いに答えを与えてくれたのが、『東海道中膝栗毛』でお馴染みの江戸神田八丁堀の住人、弥次郎兵衛と喜多八（通称、弥次喜多）の2人である。

此しゆくめいぶつういろうみせちかくなりて
北「ヲヤこゝの内は、屋根にでへぶでくまひくまのある内だ」
弥「これが名物のういろうだ」
北「ひとつ買ってみよふ。味（うめ）へかの」
弥「うめへだんか。願がおちら」
北「ヲヤ餅かとおもつたら、くすりみせだな」
弥「ハ、ハ、ハ、こうもあるふか」
ういろうを餅かとうまくだまされてこは薬じゃと苦いかはする（『東海道中膝栗毛』より）

十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』初編—江戸から箱根まで一で描かれる弥次喜多の旅のひとコマである。弥次喜多は、でくまひくま（凸凹）の屋根をもつ店（八方が八つ棟、おもてが三つ棟玉堂造りの店）の前に立ち、「うひらう」という看板を見てお菓子の外郎を想像しその甘さを思い浮かべる。やがて小田原の伝統丸薬である外郎であることを知ると「ういろうという看板を見て甘い外郎菓子かと思ったが、苦い薬の外郎かと顔をしかめる」と一句詠み上げている。『東海道中膝栗毛』には、妙薬「外郎—透

頂香」とお菓子の外郎が両方登場するのである。

さらにこのページには妙薬「外郎一透頂香」の店であると考えられる『江戸時代八棟造絵図』と題された挿絵が掲載されており、この絵に描かれる店には大きく「うひらう」「透頂香」と書かれた看板が掲げられている。1800年代に完成したこの作品の中で弥次喜多も私同様お菓子の外郎と勘違いしてしまうという場面があることから、妙薬「外郎一透頂香」は実在した歴史ある薬であると考えられる。それはいったいどのような薬だったのだろう。その効能や成分、歴史や販売の仕方、味はいったいどのようなものだったのだろう。本を使って調べてみることにした。

まず、この薬の成分や効能はどのようなものだったのだろうか。『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』を読んでみると、驚くことに妙薬「外郎一透頂香」は今もなお存在し、製法は一子相伝ながら、昔の成分製法共に変わることなく店舗たった一つの対面販売でのみ販売されているということが分かった。この本で、プロローグとして主人公である加奈子が妙薬「外郎一透頂香」を求めて小田原の店を訪れ、外郎の箱を手にする。

外装の箱には、ケイヒ・チョウコウ・ニンジン・シュクシャ・ハッカ・カンゾウ・ジャコウ等十一種類の漢方の成分と、効能として、腹痛・食中毒・吐き気・頭痛・めまい・声嘎れ・喉の痛み・乗り物酔い・歯痛・強壮薬などいくつも書かれている。

店の人は能書きを指示して、

「こんなにオールラウンドでいいのかなと思うでしょ？漢方はですね、病んでいるところ、弱っているところに自然と届き、働きかけるのです。治ろうとする生命力が薬効をキャッチするといいたしましょうか」
(『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』より)

これによれば、妙薬「外郎一透頂香」は〈外郎売〉の口上にあるように、実に多くの効き目をもたらす薬であるようだ。そしてその成分は生薬を柱として成り立っていることが分かる。

では漢方十一種類それぞれにはどのような効能があるのだろう。図書館の蔵書『生薬の世界——自然の中に薬を求めて』『生薬101の科学——薬理効果・採集法から家庭で使うコツまで』を用いて分かる範囲で調べてみた。

ケイヒー桂皮はクスノキ科シンナモム属植物の幹や枝の皮で、効能は健胃・駆風(腸内のガスの排出を促す)・解熱・鎮痛・去痰。チョウコウー丁香はチョウジの蕾で、効能は芳香性健胃や興奮(からだの各器官の働きを高める作用をする薬)。ニンジンー人參はオタネニンジンの根で、

効能は健胃・強壮(身体の栄養不足や衰弱をなおし、丈夫にすること)・興奮で、神経衰弱や虚弱者に用いる。シュクシャー縮砂はベトナム、タイ、ミャンマーに産するショウガ科植物の種子で、効能は芳香性健胃。ハッカー薄荷はハッカの葉で、効能は解熱・清涼・健胃。カンゾウー甘草はカンゾウの根で、効能は緩和・鎮痙・去痰・矯味、風邪の身体疼痛に用いる。ジャコウー麝香はジャコウジカの雄の腺分泌物で、効能は興奮・強心(さまざまな原因で衰弱した心臓の働きを高める作用)や鎮痙、とある。

実際には組み合わせや量により発揮される効能も違ってくるようだ。それこそ製法が一子相伝である所以だろう。成分を知ること、夢の妙薬であった「外郎一透頂香」がぐっと身近に感じられるようになった。

また、調べていくうちに妙薬「外郎一透頂香」は一人の歌舞伎役者の病を完治させ、千両役者にまで花開かせたといういわれがあることを知った。その歌舞伎役者とは、「不動明王の申し子」としてデビューを飾った二代目市川団十郎である。初代から名を継いだ二代目市川団十郎は、当初2つの壁に行く手を阻まれていた。

故団十郎の荒事を観たものは、一瞬にして重圧の苦悩を解き放たれる快感を味わうことが出来たのである。けれども初代の創造した荒事芸だけでは、そのまま何代も人気をつなぐことはできない。ことにきびしい舞台であるから、代々の団十郎たちは、家芸の伝統と、民衆眼光にこたえるための想像活動と、この2つの重荷を背負ったけわしい芸の道を克服しなければならなかった。(『市川団十郎』より)

このような歌舞伎という厳しい世界の中、二代目市川団十郎は新しいものを創造していかなければならないというプレッシャーを背負い、さらには役者として致命的なことに喉を患ってしまう。しかし、この2つの壁を二代目市川団十郎は、妙薬「外郎一透頂香」を用いて乗り越える。『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』の推薦の辞として、十二代目市川団十郎は以下のように述べている。

二代目市川団十郎が体調を崩し、喉を痛めたとき俳句仲間であった外郎家の隠居意仙さんの薦めで、〈ういろ〉を服用したところ、薬効によって見事に復活しました。二代目は感謝し〈ういろ〉の薬効を早口言葉のセリフに載せ、舞台上に掛けたところ大評判を得、今でもこの早口言葉はアナウンサーの勉強に使われています。(『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』より)

しかし二代目市川団十郎が妙薬「外郎一透頂香」の効能

に感動し、歌舞伎十八番の一つ〈外郎売〉として大成するまでの道のりは簡単なものではなかった。

この時、時代は江戸。歌舞伎は幕府による統制を受けていた。さらに同じころ市川団十郎の兄貴分ともいえる生島新五郎が、大奥女中絵島との不義の罪を問われ、三宅島に流罪となり、関係者1500人が処刑されるという江島生島事件も起きている。それとは対照的に、当時妙薬「外郎一透頂香」は幕府や小田原藩への献上品であり、外郎の当主は藩から町の宿老に任じられていたほどであったという。

そのような難しい立場にあった二代目市川団十郎であるが、この妙薬「外郎一透頂香」が世間に馴染みなく、ひっそりと販売が続けていることを知り、このすばらしい薬をもっと皆に知ってもらおうと〈外郎売〉の口上を完成させる。

二代目市川団十郎は直接丸薬外郎の店主に許しを得て演目『若緑勢曾我』の中でその口上を演じ、一斉を風靡した。図書館の蔵書『市川団十郎』の二代目団十郎曾我狂言上演年表を開くと、1716年享保3年正月、演目『若緑勢曾我』曾我十郎役、劇場森田座にて〈外郎売〉セリフ大当りである。私は歌舞伎に詳しくないが、二代目市川団十郎が妙薬「外郎一透頂香」によって病を吹き飛ばし、歌舞伎界でのあらたな創造に成功したことは間違いない。

では妙薬「外郎一透頂香」の歴史や販売の仕方、その味はどのようなものなのだろう。『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』の中で主人公加奈子は当主の外郎さんと以下のように言葉を交わす。

「外郎さんの祖先が小田原に来たのはいつですか」

加奈子の胸中に、聞きたいことが渦巻いている。

「16世紀初め、北条早雲の招きで京から下ってきたと伝えられています。京の外郎家は朝廷から公家の位を頂き、小田原では武士として北条家に仕えていたのです」

外郎さんはこともなげに答えるが、薬の〈ういろ〉も外郎氏も、京で応仁の乱を乗り越え、北条氏の膝元・小田原で戦国時代を生き抜いたことになる。

——途方もない歴史をもっているんだなあ。

外郎さんの案内で店舗の奥の「蔵の博物館」を見せてもらった。秤や調合用の鉢、薬を載せる三方、背負子などが展示されている。おもしろかったのは、〈ういろ〉の粒を数える匙だ。匙ごとに二十粒、十六粒、十二粒、六粒、四粒の丸薬サイズの穴が穿たれていて、ひとすくいが必要な数を計ることができる。裏返すと、それぞれに百文、三十二文、二十四文、十二文、八文と、薬の値段が書かれていた。江戸時代の、「価格も

分かる計量スプーン」といっていい。東海道を旅する人たちは、ここで道中薬を買い求め、大切に懐に忍ばせて発っていったことであろう。

……「五、六粒だったっけね。救いの神だ……」

手渡された銀色の小さな粒を、そっと含んだ。爽やかな香がする。それだけで疲れが癒される。銀色のコーティングが溶けたのか、ちょっと苦みがあるが、香気が爽快だった。（『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』より）

妙薬「外郎一透頂香」は長い歴史を霊薬として生き抜き、今なお昔と変わらない製法・成分・販売方法で受け継がれているのである。この本には『写真で見るういろ家の歴史』がカラーで掲載されている。私はこの写真で初めて、印籠や薬包紙、「価格も分かる計量スプーン」と共に写る銀色に光る夢の妙薬「外郎一透頂香」を見ることができた。

図書館の一冊の本がきっかけで興味をもった謎の妙薬「外郎一透頂香」。様々な本からこの薬が実在するものと知り、その実態が明らかになるのをワクワクしながら色々な本を手にとってその効能や成分、歴史や販売形態、味について知っていくという楽しい冒険をすることができた。次は実際に小田原まで行って、二代目団十郎や弥次喜多の会った妙薬「外郎一透頂香」を手にとってみたいと思う。

図書館にはまだまだ興味を引き、行動を起こさせる種がたくさん埋まっているに違いないと実感した。

参考文献

- 『ことばの国 新・ちくま文学の森14 〈外郎売〉』鶴見俊輔ほか編、筑摩書房、1995
- 『東海道中膝栗毛（日本古典文学大系：62）』十返舎一九著、麻生・磯次校注、岩波書店、1958
- 『東海道中膝栗毛（日本古典文学全集：49）』十返舎一九著、中村幸彦校注、小学館、1975
- 『生薬の世界——自然の中に薬を求めて』三橋博著、講談社、1978
- 『生薬101の科学——薬理効果・採集法から家庭で使うコツまで』清水岑夫著、講談社、1999
- 『市川団十郎』西山松之助著、吉川弘文館、1966
- 『歌舞伎十八番』郡司正勝校注、岩波書店、1965
- 『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』山名美和子、新人物往来社、2010

（はらだ かおり・札幌校4年）

感想文部門 優秀賞

子どもの本質をとらえ荒れを変えていく力を求めて ～「荒れる」子どもたちに教えられたことを読んで～

薦田 侑奈

現在の日本の教育には様々な問題があげられる。時代の変化に伴い子どもたちの姿にも変化が見られ、従来通りの指導ではうまくいかなくなってきたという話もよく耳にする。最近のニュースでは、仕事の重さからの「心の病」にかかる教員が今年は5400人にもなり、過去最高的人数となり17年連続の増加となった。これにおける対策も必要とされるさなか、教員自身もそれに立ち向かう姿勢や対策を自ら講じていかなければ対応できなくなっているであろう。

私は幸いにも今年、教員採用試験に合格し2011年の春からは小学校教員として教壇に立つ予定である。大学を卒業して4月からいきなり他の教員と同じ立場として働くということに関して、実戦経験の少なさから不安もある。実践力では経験のある教員の方々にはかなわないがゆえ、今の私にできることは現場に出るまでの残りの期間、教育に関する知識をしっかりと身につけて自分なりの考えを持って実践に役立てることだと考える。また、私はこれまでの人生を振り返って「荒れた」学校生活というものを経験したことがない。もちろん、人間関係でのトラブルやちょっとした問題は多々あったが、学級崩壊で授業が成立しなかったことなどはない。教育実習や学校支援ボランティアなどで私が「教員」という立場に立った時でもそうであった。ゆえに、「荒れた」子どもたち、学級において自らの経験を生かした教育活動はなかなか難しいと考えた。そのことがこの本を読もうと思ったきっかけである。

著者の今泉さんは小学校教員として勤務し、荒れた学級、荒れた子どもたちを経験してきた。その時の経験やエピソード、そして変わっていく子どもの姿やそんな子どもたちから学んだことがこの本には書かれている。本の中での“Ⅰ. 子どもたちの中の新しい「荒れ」の広がり”には、荒れていた5年生が6年生に進級する際に担任になる先生がおらず結果的にその先生が引き受けたという話があった。私自身、読んでいて覚悟はしていたがその「荒れた学級」の様子がひしひしと伝わってきて、恐ろしくなった。教師が何を言っても言うことを聞かないどころかえって反抗されてしまう、心が通じ合わない、言葉が響かない、そのことの辛さがもろに文章の中に現れていた。学級の中のいじめや暴力問題も教師の目の前で当たり前のように発生していた。

荒れた学級を担当したときに大切なのは、最初からきち

んとさせようと思わずゆっくり待つ姿勢で徐々に高い峰を目指していくことだと今泉さんは言う。私自身、教育実習などの経験から教師としてどこか見栄をはってしまいそうになることが多々あった。私が指導しなくては、私が何とか教えなくては、という思いばかりが常に先走っていたような気がする。特に小学校教員の場合、ほとんどの教科を担当が一人で担当するということもあり、子どもと接する時間は必然的に長くなる。自分の体裁を保とうとしたり、時に自分の意志の赴くままに子どもたちを導いていこうという思いも出てくるのではないかと思う。しかし、見栄を気にしては子どもはすぐに見抜く。長い時間接する小学校教員ならなおさらである。同時代を生きる一人の人間として対応しなければならない。また、教師自身も「教師」という立場と同時に人間としての自分自身の姿を子どもにさらけだしていくことで、心の通い合いを徐々に成立させていかなければならないと感じた。また、これまでの日本の教育の中には子どもたちを“しっかりと教え込まなければならない”という管理の対象すなわち「客体」として扱っている様子があると今泉さんは言う。しかし、子どもこそ学校生活の主人公であり、成長していくのは子ども自身である。ゆえに、子どもを主体として見ていく視点こそ必要だ。しかし、私は時に子どもを「主体」の上での「客体」として見る必要もあるのではないかと感じる。これまでの考え方が必要だというわけではない。主体である子どもたちに対して、教師として自らを反省し子どもたちにおける関わりを考える際には子どもを客体としてとらえ、そこから内省への動きも教育活動の上では不可欠だと考える。教師が子どもに与える影響は大きい。そして、その指導の在り方は目の前の子どもによって大いに変わりうる。その時に、子どもたちが学校生活の中で主人公としてどのようにしたら輝いていけるか、動いていけるかという主体としての子どもと、そのために教師として何ができるか、自分の言動によって子どもがどのような返し方をしたか、どのような反応があったかという客体としての子ども、その両者の視点が必要なのではないか。実際にはこの狭間で揺れるのが教師なのかもしれないが、適切な視点の持ち方・切り替え方も教師に求められる力量なのかもしれない。

学校生活の中で、大きな問題となっている「いじめ・暴力・暴言・仲間外し」。これはどこの学校でもどこの学級でも悲しいことにちょっとしたきっかけで起こりうること

である。これらの行為は教師として許してはいけないことであり、これによる自殺者をだすことは何があっても避けたいことである。本の中でも、これらの行為は日常に及んでいた。過去に今泉さんはこれらを「紙上討論」という方法で徐々に解決した。子どもたちに毎日朝の15分間プリントを配り、感想を書かせる。何についての感想かという、そのクラスで起こった事実の文章を2〜3つのせて、それに対してであったり、友達からのメッセージに対してであったり、自分の経験などである。匿名性や家への持ち帰りなどに十分に配慮して行われたこの紙上討論では徐々に正直に自分の気持ちを述べる子どもが増え、それにより子ども自身が自分のした行為を直視せざるをえなくなり、またいじめや暴力などを受けた子どもの痛みを知り、「本当はみんなと仲良くしたいんだ」「今までごめんなさい」という声が増え、クラスが皆いい方向に向かっていったという。教師も子どもからのメッセージに赤ペンでコメントを加え、事実を伝えてくれた勇気をたたえたり、共感のメッセージを書いた。「紙に書く」ということは、記録に残る点ではしっかりと配慮することが必要であるが、紙に書くことで改めて自分の気持ちと向き合うことができる点でも優れている。人と話すことが苦手な子どもにとっても正直な気持ちを伝えやすい手段だと感じた。

子どもが荒れる原因は必ずどこかにある。本来、子どもは幸せであれば人を傷つけたり攻撃したりはしない。その原因を教師は把握しながら子どもと日々接する必要がある。今泉さんは、学級の立て直しの上で、一番関わりの多い授業時間にも手を抜くことはなかった。「何のためにわざわざ学校に来て勉強しているのか」という子どもたちの問いに答える授業をするべきだという。本を読んでいた、授業の導入、入り口で子どもたちの知的好奇心をひきつける魅力的な授業、推理・想像しながらみんなで発見していく授業、子どもたちの失敗・間違いを何より大切にする授業、を非常に意識しているという印象を受けた。子どもの発言の一つ一つに丁寧に対応し、間違いであっても「それは間違いだよ」とさらっと流すことなく「そのような考え方をできた君はすごいね」とほめる。それによって子どもは自分の意見がたとえ間違っているとしても教師に認められたことで安心してクラス内でも発言ができるようになる。まずは、子どもが自由に自信を持って発言しあえる環境こそ授業において大切であり、それは学力をつけることだけでなく人間性の形成にも大いに関与していると感じた。権力を持っている子どもの意見に周りの子どもがしがたったり、間違いを恐れたり、そのようなことをしては学びではない。間違いは物事の一面をとらえているということであり、その物事の本質につながる大切な入り口である。授業は常に子どもが未知の世界に入っていく時間である。

子どもがいかにワクワクするような授業をするか、子どもが「こう思ったから発言したい!」という授業はどうしたらできるのか、教師として十分な教材研究を行い、教師自身も授業を楽しめるようなものができればいいと思う。

この本を読むまで私は、授業におけるあいさつ、いわゆる「号令」ははじめをつけるために授業の始まり・終わりにおいて非常に重要なものだと考えていた。しかし、荒れた学級を担当した場合はきちんとした号令はなかなかできない。そして、そこにも日本の過去の軍国主義の一面も見られるという。号令のような外的緊張ではなく、授業の中で自然に子どもが惹かれていくような内的緊張が必要だということを改めて感じた。確かに、いくら号令でしっかりと挨拶ができて授業中に良い意味での緊張が解けてしまっただけでは意味がない。荒れた学級では、子どもが授業時間になっても席についていないことも多いだろう。その時に、ただ上から叱りつけたりするのではなく、そもそも号令という手段ではなくて授業に入って子どもを惹きつけること、そこから子どもが自然と緊張感を持つような授業をすることの大切さを感じた。

「荒れた」学級、というのはできることなら経験しない方がいいし、落ち着いた授業運営・学級活動ができることはもちろんいいことである。しかし、この本からその経験が必ずいつか役に立つこと、荒れた子どもたちと接することによって教育活動の本質や大切なことを直に感じるができる、ということがわかった。また、うまくいかないことばかりでも、余裕を持ち焦らずゆっくりと子どもとともに成長していくことを心がけるべきだと感じた。そして、子どもを「待つ」こと。「待つ」というのは、これまでの大学での講義や教育実習でも教えていただいたことだが、子どもの成長や反応をあせらずに「待つ」、期待通りにならなくても「待つ」、その辛抱強さと「何とかなるさ」と構えてゆったりした姿勢を教員として持っていこうと感じた。私の子ども時代とも、どこかまた今の子どもとは違うというのは教育実習やボランティア先でも感じたことがある。時代が違うのだから当然なのだが、本質は決して変わっていないはずである。そして、私もこれからの長い教員生活をスタートさせる上で壁にぶつかることは何回でもあるはずだ。その時に、この本から学んだ「子どもへの接し方」「教員としての自己の持ち方」を常に問い続け、ゆっくりと成長していける教員でありたい。

『「荒れる」子どもたちに教えられたこと』
今泉博著、ひとなる書房、1998

(こもだ ゆうな・札幌校4年)

小論文部門 佳作

大江健三郎初期作品における「弟」の影響

井上 晋

大江健三郎が初期作品で描く舞台、登場人物については大きく「戦時中、農村部で生きる子ども達」、あるいは「戦後、都市部で生きる学生」の二種類に分類することが可能である。私はこれらの作品を読むにあたり、自分自身が大学に入学するまで農村部で暮らしており、閉鎖的な空間での近隣の住民との親しい間柄のなかで育ったこと、大学に入学して以降、開放的な空間のなかでそれまで感じることの無かった孤独感を感じていたことから、わずかながら感情移入をして読み込むことができた。とりわけ、年の離れた兄と常に行動を共にしていた私にとって『飼育』『芽むしり仔撃ち』で登場する「弟」の兄に対する想いに強く共感できる描写が多くあった。

そこで、本論文を書くにあたり大江健三郎が初期作品で描いた「弟」像に対して、その存在の意義を考察することとする。

まず、『飼育』『芽むしり仔撃ち』における「弟」の人物像について考察していきたい。この二作品では、共通して「僕」の幼い弟がいる。両作品とも「弟」は純粹さを持ち、強い兄弟愛で結ばれている。

しかし、結末において『飼育』では「僕」が草原にいる弟を捜しに行くという形で終了するが、『芽むしり仔撃ち』の「弟」は、既に可愛がっていた犬に疫病の疑いをかけられ仲間たちに殺されたことで、失踪してしまい、その後おそらく死んでしまったであろう描写として、谷の岩の間で「弟」の携帯品袋が落ちているのが見つかる。

そして「僕」は愛する全てのものを失ったことで村からの追放を受け入れることとなる。

こうした作品間における結末部、そしてその状況下における「僕」の心的状況の違いに「弟」の存在の有無が強く影響しているものと考え、以下考察を続けていく。

まず、各作品の「弟」の描写に注目すると、

『芽むしり仔撃ち』

- ・弟が眼をきらきらさせて
- ・弟は夢見のように、うっとりしていった
- ・驚きのあまりに気絶しそうな弱々しきで弟が嘆息した
- ・弟が眼に涙をいっぱいためていった。

『飼育』

- ・弟が夢みるようにいった。
- ・弟は微笑んでいった。

- ・うっとりして弟はいった。
- ・「恐かったか、一人で」と僕は優しくいった。弟は真剣な目をして首を振った。
- ・弟の急に開かれた眼から、みなぎる疲れとおびえが融けていった。

というように、無邪気さや臆病さなど幼い子どもらしさは各作品とも同じような形で表現している。

次に、登場回数を比較するため、それぞれの「弟」が主語として登場する場面を抽出したところ、『芽むしり仔撃ち』は一八九回、『飼育』は六三回となった。ページ数では『芽むしり仔撃ち』が一一四頁、『飼育』が三七頁となっており、『芽むしり仔撃ち』のテキストは『飼育』のおおよそ三倍程度の分量と考えると、「弟」の登場回数はほぼ同じと考えられる。しかし、そのなかで、「弟」が単体で主語となる回数は『芽むしり仔撃ち』が一六一回で割合にして八割二分、『飼育』が三三回で割合にして五割二分となり、こうした結果から『芽むしり仔撃ち』の弟は独立した描写が多くあるのに対し、『飼育』の「弟」は他者との依存性が高いものと考えられる。

以上のことを踏まえて、まず『芽むしり仔撃ち』の「弟」について考察すると、本文の

弟が、見られる存在、檻のなかの獣の立場にうまく慣れていないことを意味するものだった。

(二〇二頁)

という表現、また、

あの人殺しの時代、狂気の時代に、僕ら子供たちだけが緊密な連帯を造りあげえる唯一の存在だったのかもしれない。

(二〇五頁)

と語られていることに注目したい。『芽むしり仔撃ち』の「弟」は「僕」の父が「弟」の疎開先を捜しあぐねた結果、感化院の集団疎開に便乗させた。そうした背景の中で、「弟」は水のように柔軟に感化院の仲間と溶け込む。こうした立場の「弟」が、感化院の仲間たちとの連帯を作り上げるということは、その存在意義が「子どもたちだけで監禁された村に暮らす」という設定において、大人たちと暮らす村が舞台である『飼育』と比較しても作品の重要性を占めた

人物であると考えられる。磯貝英夫氏(※1)は『芽むしり仔撃ち』の作品論にて

全体としていちばんあざやかなのは、主人公の弟である。大江の作品には兄弟の出てくるものが多いが、この弟の可憐さがメルヘンの中心になっている。とくにかれのきじを捕ったときの心の震えは、「少年期の記憶」の甘美なものゝ典型であろう。

と論じている。大江初期作品に登場する弟を「無垢」の象徴と捉え論を展開した津久井秀一氏(※2)は、「弟」が雉を捕まえる場面について以下のように述べている。

閉ざされた「村」に雪が降り、世界を白一色に覆う時、少年達は「狩り」に興じ、獲物を囲んで「祭り」を行う。少年達が「疫病」や置き去りにされた絶望感を反転させ、純粋に自分達だけの生活を謳歌する作中最も美しい場面だが、この祭りの発端となった「雉」の捕獲者が「弟」であるという事情は、極めて象徴的だ。

感化院の少年達のなかで唯一無二の汚れなき存在の「弟」が自分達だけの、大人が関与しない自由な世界での生活を謳歌する発端として雉を捕獲することで、その世界が、汚れない自由な世界で一層際立たせているということがここから考えられる。そしてこの状況を頂点に、突如として自分の可愛がっていた犬が疫病の疑いにより仲間たちの手で殺されることでその場から駆け去り、後に「弟」の携帯品袋だけが川で発見されることにより死を暗示する結末で作品からフェードアウトしていくこととなる。

次に『飼育』について考察する。津久井氏は、「僕」が弟(＝無垢)との関係性を、自らのアイデンティティーを確保する上で必要不可欠な存在だと考えていると考察している。その根拠となるのが、

明りとりから数かずの眼が兎のようにつりさげられている僕の恥辱を見つめた。それらの眼のなかに弟の濡れて黒い眼があったら、僕は恥じて舌を嚙みきっただろう。

(一三二頁)

という、「僕」が地下倉で黒人兵の捕虜となり、大人たちがその場に集まっている場面における同氏の、

ここで「僕」が自分が置かれている「恥辱」の状況を

絶対に「弟」に見られたくないと考えている点も注目する必要があるだろう。幽閉されてしまった「恥辱」と死への恐怖、そうしたものを「弟」に見られることによって、これまでの自分と「弟」との関係、すなわち自分と「無垢」との関係が決定的に壊れてしまう。そのことを何より「僕」は避けたいと願っている。(略)つまり「弟」は、「純真さ」「無垢」を喪った「僕」がその存在を保つための最後の砦だということを意味する。

という論である。「弟」についての先述した考察を踏まえると、幼い子どもらしさのある「弟」と「僕」は『飼育』においては常に行動をともにし、『芽むしり仔撃ち』よりも、主体性は薄いものがある。つまり『飼育』の「弟」は「僕」とともに行動をともにすることで「僕」の子どもらしさや純粋さ、また弟を想う兄としてのアイデンティティーを確立するうえでの重要な役割を担っていると考ええる。

以上の考察から、両作品ともに無垢なる存在として登場していることが分かる。その上で『芽むしり仔撃ち』において、「弟」が失踪した後に「僕」が、

僕は弟から見棄てられたのだと考えた。僕が中学校の寄宿舎で上級生を刺し、最初に感化院へ送られた時も、そこを脱走して玩具工場の女工と貧しくて小っぱな同棲生活をおくっているのを警官と父に見つけられて汚れた服と悪い病気を持って家に戻った時も、そして再び感化院に収容された時も、弟は僕を見棄てなかったのに、いま彼は僕を見棄てていた。

(二九三頁)

と、「弟に見棄てられた」という表現をしていることから「僕」自身、「弟」に対して依存心が高かったことが見受けられる。この依存心については、『飼育』においても「僕」が「弟」を捜しに行く場面が結末部にあてられている。しかし、この強い依存心さえも「弟」の失踪、そして「弟」の携帯品袋だけが谷底の川にあったという「死」の暗示により『芽むしり仔撃ち』では絶たれてしまう。そして「僕」は村からの追放を受け入れる。

平野謙氏(※3)は『芽むしり仔撃ち』について、それまでの初期作品と比較し以下のように論じている。

ここではそういう人間認識が、勁くしなやかな液体の表面張力のように、いままさにあふれようとする一歩手前の微妙な緊張と調和を保っている。というのは、

それまでのデスペレートな徒労や絶望を中心とした受け身一方の人間認識が、一つの完結した想像世界の劇的構成のゆえに、ようやく能動的に転化しようとする兆しをみせている、ということである。

大江健三郎の初期作品の多くは最後に徒労感や閉塞感を感じながら作品が終了するという特徴がある。このことを踏まえたとき、平野氏の「受け身一方」から「能動的」な転化という論について、結末部での「自ら追放を受け入れ村を脱走する」という行為が、「能動的」な動きとして当てはまると考える。そしてそれは、『芽むしり仔撃ち』の結末部をそれまでの初期作品とは異なる形態によって迎えたということがいえる。そして、この結末部を作り上げた要因となり得る人物として、死をもって「僕」に絶望感を与えた「弟」の存在が挙げられるだろう。ここに、「弟」の存在が大江初期作品に新しい流れを生み出したことが言えるのではないだろうか。

さらに、ここから『芽むしり仔撃ち』『飼育』以前に発表された戦後を舞台とした作品である『死者の奢り』における一つの場面について考えてみる。この作品の主人公である「僕」は、死体を古い水槽から新しい水槽へ移すアルバイトをしている。そして、「死者」との対話により「僕」は「死者」の世界に足を踏み入れたという考えに陥る。

「死者」の世界に足を踏み入れたと自覚するのは、「僕」が「死者」との対話以降、外に出た際に中年の男を少年と間違え、声をかけて睨まれることが原因となる。その際の描写のなかに、

僕は明るい音にみちた言葉で看護婦や少年に話しかけたいと思いながら、暫く看護婦に並んで歩いた。看護婦は僕に、好意にみちた微笑をむけ、僕はそれに答えるために、微笑みながら少年のギブスをいれた肩に軽く指をふれた。この少年は僕を優しくった兄のようだと考え、長い間静かなもの思いにふけるだろう。

(三二頁)

とあることに注目したい。

ここで「優しくった兄」という立場を、少年を通して回想したのは「僕」自身であり、「死者」との対話により、不動のものとしての「過去」が利他的ながら「僕」を包み込み、「死者」と同様に、少年と思わしき生きた人物(＝中年の男)に、希望を持っていた少年時代をともに過ごした弟を仮託させてしまったことで「僕」の躰きは生じたのではないだろうか。つまり、「僕」は、生者にまで死者と

同様の仮託を試みてしまったこと、そして過去と死者の世界とに存する不動性に自己の意識を介入させ内向的な思考を育てていったこと、そして結果として中年の男による「憎悪が暗く沈んでいる眼」を認めたことにより、「僕」にとって「死者の世界に足を踏み入れた」という表現に相応しい結果を自ら招いてしまったもの考える。

ここから戦後の作品においても戦時中を生きた兄弟の愛情のようなものが見える。こうした視点からも大江初期作品における「弟」の存在意義が見出せるのではないだろうか。

以上のことから、大江初期作品において「弟」が登場する作品においてその存在は「僕」のアイデンティティーを与えることや、無垢な存在として叙情的に作品を描く上で非常に重要なものであることが分かる。さらに『芽むしり仔撃ち』において言えば、それまで以上に確立されたアイデンティティーを持つ「弟」を登場させ、失踪させることにより、それまでになかった主人公「僕」の心的状況が生み出され、そのことにより初期作品の終止符を打ったと言われることもあるため、これらの点を踏まえた上でも「弟」の存在は大江初期作品に欠かせないものであることが言えるだろう。

《参考文献》

(※1) 磯貝英夫「芽むしり仔撃ち」

(「国文学 解釈と教材の研究」第十六巻 学燈社 昭和四十六年一月号)

(※2) 津久井秀一「「弟」の行方—大江健三郎における「無垢」

(「宇大国語論究」宇都宮大学国語教育学会 平成二十年三月)

(※3) 『芽むしり仔撃ち』大江健三郎著 新潮社 昭和四十五年五月三十一日

(いのうえ すすむ・釧路校4年)

感想文部門 佳作

明日に向かうために

菅原 智奈美

大学の正面玄関を出て、校門に続く道を通って家に帰る。普段から急ぎ足の私が、最近では大きな白樺並木が教えてくれる季節の移り変わりを嘯み締めながら、ゆっくりと歩いている。去年もこの季節を見た。でも今年は、目に見えるもの全てが違う。

十九歳。もう、十九歳。

なぜだか、切なくなった。横断歩道の信号が点滅しているのに、足下の一步が重い。だんだん目の前の景色が霞んでくる。頬を拭ったカーディガンの色が変わった。今、目に見えない何かが、ここを動かたくない私の背中を必死で押そうとする。

「さゆきがさゆきのままでいられるように、いつだって自分だけのリズムをとるんだ」。別れ際、真ちゃんはさゆきにそうアドバイスした。この言葉が、今も私の心に真っ直ぐに響いてくる。

中学一年生のさゆきは、素直で純粋な女の子だ。近所に住むいとこの真ちゃんと仲良しで、幼い頃からよく一緒に遊んでいた。そんな真ちゃんが、東京でバンドをやりたいという夢を叶えるために上京しようと決意する。いつだって夢に向かって一生懸命な真ちゃん。大切な真ちゃんの夢が、手の届くところまでやってきた。さゆきはそれがとても嬉しかったのだろう。さゆきにはまだ夢がなかった。だからこそ、そんな真ちゃんの姿にさゆきはたくさん影響を受けたに違いない。さゆきの家族はみんな、真ちゃんを良く思っていないかった。でも、高校に行かなかろうが、金髪頭だろうが、今も昔も変わらぬ真ちゃん。そんな真ちゃんを、さゆきは大好きだった。

「リズム」。真ちゃんの言葉の中にも含まれていて、この本のタイトルにもなっているこの言葉に、私は過剰に反応していた。中学校と高校時代、吹奏楽部に所属していた私には、リズムがどんな曲においても大切だということはよく分かる。リズムが崩れてしまえば、メロディーもそれを支える他の旋律も、全てが嘯み合わなくなってしまうからだ。バンドをやっている真ちゃんは、生きていく上でもそれは同じだということを知っていた。周りなんか気にせずに堂々と自分の道を進んでいく真ちゃん。さゆきはそんな真ちゃんの背中を、少しだけ複雑な気持ちで見ているのかもしれない。真ちゃんを選択を応援したいという気持ちとは反対側にある、ちょっぴり胸がくすぐられる思い。ずっと一緒だった大切な人が、自分より先に大人になっていく。それは嬉しくもあり、切なくもある。

大人になるにつれて生まれてきた、様々な変化。私もさ

ゆきと同じようにそれを感じている。自分を取り巻く環境も、関わる人も変わっていった。それと同時に、あれこれ考えずにまずは何事にも挑戦してみようとする勢いがなくなった。周りからの評価を生きがいにする自分がいなくなった。自分自身の変化は、私が一番よく分かっている。でも、中には受け入れたくない自分もいる。良い意味でも悪い意味でも、私は大人になった。

さゆきも、幼い頃には想像もしなかった現実を目の前にしていくにつれて、戸惑っていったに違いない。さゆきの周りに起こったことは、真ちゃんの上京だけではない。真ちゃんの両親の離婚もその一つだった。自分の周りにあった幸せな光景が、また一つ崩れていく。私だったらどうするだろう。泣き喚くだろうか。それとも、黙ってその場に佇んでいるだけだろうか。受け入れたくないこと、でも受け入れるしかないこと。その両方を抱えて生きていくということは、まだ中学生のさゆきにとって難しいことだったはずだ。でも、それを諦めずにさゆきは歩き続ける。その強さは一体どこから来るのだろうか。それが知りたくて、私はページをめくり続ける。

私の中に新しい風が吹き込んできた。さゆきは、私が思っていた以上に成長していたようだ。いつだって自分をごまかして、自分と向き合うことをしなかった幼い頃の私とは違う。さゆきはいつでも前向きだった。果てしない未来を想像しながら、からっぽの明日にたくさんのものを詰め込んでいく。そんな風に生きていこうとする力がさゆきにはあった。どんな現実にも負けないたくましさ。そんな強さも、真ちゃんからもらったのだろうか。もしかしたらさゆきは、不安に思いながらも、自分が大人になっていくのを心のどこかで楽しみにしていたのかもしれない。それが強さの秘密なのではないだろうか。

裏表紙に辿りついた。深呼吸をして本を裏返し、机の上にそっと置く。そして目を閉じて考えてみた。そこで初めて分かったこと。

大人になることを恐れないさゆき。そして、大人になっていくことに抵抗を覚えている自分。私はいつだって、変わっていくことを恐れている。私は私のままでいたい。でも、そんな保障はどこにあるのだろうか。私がずっと変わらずにいられるという約束は、誰と交わせばいいのだろうか。そんなことを毎日のように考えている。今日もまた、この本を手を取った。リズムが崩れてきた。そんな風に感じたら、もう一度真ちゃんの言葉を思い出す。なんだか、力が湧いてくる。また進んでいけそうな気がする。

向こうに、階段を二段越して駆け上がっていこうとする自分が見える。あと一年もすれば、私は二十歳になるのだ。この本に出会って漲った力を使って、私は大きく飛躍するための元気をもらった。待て待て、もう少し落ち着け。無意味に焦っている自分の洋服の袖をつかんでそんな言葉をかけたくなる。

やはりたまに私は、まだ見えない自分の未来に目を瞑りたくなることがある。私たちは、大人になっていく。これから生きていく長い人生の中で、どれだけのものが、人が変わっていくのだろう。ここに来るまでに、時に大切なものを抱きしめて、時にそれを手離して、いつも何かを選択して生きていかなければならないことを知った。心が痛む思いもたくさんするだろうし、数え切れないほど涙も流すだろう。未来を想像すればいつだって明るい。自分のプランがあるからだ。でもそれと同時に、その実現のためにどれほどのものを失っていくのだろうかとても不安になる。私は、臆病だ。

このままがいい、ずっとこのままがいいと願うことがある。涙がとめどなく溢れてきて、胸が苦しい。現実を受け止められない自分、受け止めたくない自分。様々な自分が交差して、負の感情からなかなか抜け出せない。それでも私たちは歩いていかなければならない。私は、大人になっていくこと、変わっていくことは、悲しいことではなく、いつも嬉しいことであってほしいと思う。だからこそ、切なさ負けずに頑張ろうと思えるような気がする。

変わっていくことは、何も怖いことなんかじゃない。この本を手にとると、いつもそんなことを言われているような気がする。今抱えているこの気持ちを大切に、純粋な気持ちで生きていくこと。私はさゆきからそんなことを学んだ。

そしてもう一人、私の心を動かした登場人物がいる。それは、さゆきと真ちゃんの幼なじみのテツだ。テツはさゆきから見てもとても弱い。泣き虫でいじめられっ子。でもテツは、さゆきのことをいつも見守っていた。上京する真ちゃんに隠れて涙していたさゆきの隣に居続けた。「僕、強くなるよ」。そう言って、さゆきよりも先に真ちゃんの夢への一歩を後押しした。それからというもの、テツはなんだか強くなったような気がする。人は、きっかけがあれば強くなれるものなのだろうか。腹をくぐれば、何でも受け入れることができるのだろうか。そんなに簡単なことではない。でもそういう変わり方もあるのだと思った。変わるきっかけは、テツが自分で作り出したのかもしれない。泣き虫で優しいテツだからこそ、内に秘めたものが強かった。さゆきと同じようにテツもまた、大人になっていった。

いつからかこの物語には続きがある。私はまだ読んでいない。私は、さゆきのこれからを想像してみた。でも、な

んとなく予想はできる。壁に突き当たった時には一生懸命考え、そして何かを選んで、そうやって大人になっていくのだろう。自分らしく、彼女にしか叩けないリズムを奏でながら生きていくのだろう。さゆきなら、素敵な未来を描ける。私はそう信じている。

大学生になった私は今、たくさんの人に出会い、たくさんの経験をしている。十九歳という、色々な意味で人生の出発点に立った。伏せていた顔を上げてみると、真っ直ぐな一本の道が私の前に走っている。今やっと体中に背負っていた荷物を下ろした。そして、重い足を一步步、自分の意思で運ぼうとしている。この自分の中の変化は、これからは私の背中を押してくれるだろう。中学生の女の子との、大切な出会いがあったから。

私は将来、教師という道を選びたいと思っている。今まで私が経験してきたたくさんの出会い。いつ、誰との出会いが、どんなものとの出会いが人生を変えていくかわからない。生きている一瞬一瞬がかけがえのない宝物で、とても尊い。今、心からそう思えるようになった。そんな自分の思いを自分自身の将来に託してみたい。

それと同時に、国際協力の現場にも足を踏み入れていきたいと思う。世界中のどんな子どもたちにも、みんな平等に未来がある。国や人種、言葉や文化に関係なく、いつでも誰かの立場に立って寄り添っていたい。そして、一緒に考えながら生きていきたい。

いつでも真っ直ぐに自分を見つめていたいと思うようになった。心に嘘をつくことなく、自分を偽ることなく。私が見たことのない世界が、まだまだたくさんある。そんな世界を、自分の足で見に行きたい。たくさん遠回りしてやっと見つけた大切な夢。

今描く自分の未来を確実に実現させたい。自分のプラン通りの未来を、私はまだどこかで望んでいるのかもしれない。でも、完璧は欲しくない。その時の自分の選択をいつだって誇りに思えるように、自分で選んだ道は自分で正しくしていきたいと思う。迷ったら「やっpegらん」と、いつも自分の背中を押してあげたい。そして、どんな時も自分を信じてあげたい。

自分だけのリズムを叩きながら、十九歳というこの時を一生懸命生きていく。私はそうやって大人になっていこうと思う。

「先生！」ぎゅっと背中に抱きつかれ、笑顔で振り返る。そんな、幸せな夢を見た。

『リズム』森絵都著、講談社、1991

(すがわら ちなみ・函館校1年)

感想文部門 佳作

本との出会い、赤尾先生との出会い

杉山 亜里紗

乙武洋匡さんと言えば『五体不満足』の著者で、生まれつき手足の無い先天性四肢切断の障害を持って生まれたということはほとんどの人が知っているだろう。『五体不満足』は私も小学生の時に読んだことがあった。また、乙武さんが一時期、小学校教師として教壇に立っていたというのはテレビで何かで耳にしたことがあった。

数ヶ月前に、乙武さんが最近流行しているツイッターをやっていると知った。その頃はちょうど、乙武さん自身の教師生活を元にした小説『だいじょうぶ3組』が発売されて、その宣伝のツイート（ツイッターへの投稿）が多くあった。まず私自身がその小説に興味を持ったのと、教育大学の図書館にあれば多くの人が手に取ってくれるのではないかと思い、図書購入希望として申し込んだ。そして本が購入されて手元に届き読み終えた現在、“素晴らしい本との出会い”を表現するにはこちらを対象図書とする方が適当だと判断して、当初提出するつもりであり、しかも行き詰まっていた論文を大急ぎで書き直している次第である。

『だいじょうぶ3組』は著者である乙武さんと同じく、生まれながらにして四肢が無いという障害を持ち、電動車椅子に乗って生活している赤尾慎之介を主人公とする。読んでいて、私も彼のクラスの一員として様々なことを教わったように感じたので、以下、彼を「赤尾先生」と表記することにする。赤尾先生は市の独自採用の教師として松浦西小学校へ赴任して、5年3組の担任を持つことになった。学校生活では、彼には介助員として白石優作という小学校からの親友がついている。5年3組では児童のこころの問題や学校行事でのことなど、どこのクラスにも見受けられるような様々な問題が日々絶えない。赤尾先生は白石やクラスの児童、他の教師たちの力を借りてそれらに立ち向かい、最善の解決方法を探し出していくといったストーリーになっている。描かれているのは、5年3組の始業式から終業式までの1年間。クラスの人数は28人で、よく話題に上がるのは、主にクラスで目立つタイプの児童数名。私は大学生になってからまだ小学校高学年と接したことがないのだが、自分が小学生だった頃にもいた、大抵のクラスにいるような想像のしやすい児童たちである。

この話が「小説」である以上、描かれている子どもたちや教師たちは作者の意図通りに動かされたものであり、登場人物や読者の心に響かせる赤尾先生の台詞も推敲して作られたものであろう。実際の教育現場では、こんな風に都

合よく物事が展開するだろうかと読んでいて思うこともあった。しかしこの物語の最大のポイントである、“手足の無い障害者の教師”とは、恐らく乙武さんにしか体験し得なかったことだ。このような、体験を元にした事実にはほど近い設定であるからこそ、赤尾先生の言動が納得のできるものであり、少なくとも私にはただの教育の理想論とは感じられなかったのではないかと思う。

物語を読み進めていくと、第一章のタイトルから既に気になる言葉が出てきた。「フツー」である。「普通」ではなく「フツー」。ここで赤尾先生は、校庭の桜の木の下で花見をしながら学級会をしないかと提案した。戸惑う白石に対して、赤尾先生は自分自身がフツーでないのだから、教師生活においてフツーをものさしにするのはやめると言う。この「フツー」は他の章にも登場する。姉がダウン症であることに複雑な思いを持つ女子児童のために行った道徳の授業にて、障害者や外国人などのようなフツーじゃない人は「ヘン」なのかと問う。児童の間では、フツーでなくてもその人はその人でいいといった意見が出る。ここでも「変」がカタカナで表記されている。これらの表記は、もちろん乙武さんの思いを訴えたものであろう。普通を基準とし、普通にとられる人々に疑問の目を向けているということであり、それを行うのは普通の人には難しい。赤尾先生、すなわち乙武さんの立場だからこそできることなのではないだろうか。

この「フツー」への疑問は、日々を普通に生活している普通の大学生と自分では思っている私に、そもそも何をもって普通とみなすのかという視点を与えてくれた。だが、小学校生活のやや遠い記憶や、教育フィールド研究でのそれぞれのクラスの様子を思い起こすと、教育現場において「普通」はどのように扱われるべきなのかを考えるのは難しいと感じる。他人と違うことを恐れて無理に周りに合わせるのは、やはりよくないことと思う。しかし教師の立場になれば、児童生徒にある程度普通な行動を取ってほしいということもあるだろう。「普通」と「調和」との違いも難しいところである。だから私は結論として、赤尾先生の言葉のフツー、フツーでないということよりも、その人はその人でいいという部分こそが重要だと思った。そして、それを児童生徒の一人ひとりに伝えられるようになりたいという新たな目標も見えてきた。

このことに関連して、最終章のタイトルは「みんなちがって、みんないい。」である。もちろんこの章の中には、金

子みすゞの詩「わたしと小鳥とすずと」が登場する。バレンタインデーに失恋してしまい、自分には取り柄が無いと落ち込んだクラスのムードメーカー的存在の少年に、彼の個性について気付かせようと赤尾先生が教材として用意したものである。この物語では道德の時間だが、確か私は国語の時間でこの詩に触れたと記憶している。赤尾先生による詩の解説の中には、今までに気付かなかった発見があった。この詩は「何が」違っていいと伝えたいのか。話の中で児童の1人が言ったように、一人ひとりの良いところだと私も思っていた。しかしこの詩には、わたしや小鳥やすずの「できないこと」が並んでいる。つまり、できないことや苦手なことがそれぞれ違って良いと伝えなかったのである。これは新発見であった。あるいは、習ったけれどすっかり忘れてしまっていたことなのかもしれない。どちらにしろ、先述した目標と合わせて心に留めておきたいことだと思った。

ある作品のメッセージ性を引用している話はこの他にもあり、これは特に気になるところであった。松浦西小学校の運動会の時期に「今月の歌」として選ばれた、「世界に一つだけの花」である。その歌詞の、ナンバーワンよりオンリーワンを目指そうというメッセージは、実際の教育現場でも多く用いられてきたものであろう。実際に、私が中学生の時の保健だよりのタイトルは「Only One」であった。赤尾先生はこの「オンリーワン」に引っかかりを覚える。それは隣の5年2組の担任の教師も同じであった。その教師の話によると、この歌はこれから能力が伸びるでもない30代辺りの世代の人間を救う歌詞としてびったりだと言う。そしてナンバーワンになれる可能性のある子どもたちに、ナンバーワンになることの否定というのはどうなのか、ということである。またもや、私の知らなかった視点が現れた。続けて、一番になることが重要なのではなく、一番を目指す過程の努力や挫折が重要なだと語られる。しかし今の教育現場は、子どもを傷つかせないようにチャレンジさせていない。この歌に対しての赤尾先生の答えは、目指すところはオンリーワンだが、オンリーワンになるためにはナンバーワンを目指す時期が必要だというもの。そこで運動会の徒競走で、全レースの一位を3組が独占するという目標を掲げた。しかも達成できたなら、赤尾先生は坊主にするという児童との勝負付きである。結果は、最終レースで目標達成ならず。それでも赤尾先生はみんなの頑張りを認め、児童たちに自身の頭を剃らせるのであった。

別にナンバーワンでなくていい、という気持ちを今の私なら理解できる。特に諦めや卑下の意味を含んでいるわけではなく、ナンバーワンへの興味が薄れてきているためである。しかし、これは既にナンバーワンになれない悔しさ

(昔は結構負けず嫌いな方だったように思う)や、小さなものでも獲得できたナンバーワンを私が経験しているからであろう。そんな経験の無いまま、子どもたちにオンリーワンを目指させるというのは、確かに考えさせられる。

これらのような赤尾先生の考えの他に、この物語は教師の裏側が描かれているので参考になる。たびたび出てくるのは、赤尾先生が先輩教師への相談のために飲みに行くシーン。内容はフィクションだとしても、学校外での先生同士のやりとりが覗ける機会となった。他にも職員室での気の合う先生・合わない先生との対話や、先輩教師からの叱責。今までに感じたことのある先生同士の仲というものも、こんな感じだったのだろうかと思うと少しおかしかった。また、それってどうなんだろう?と思う最近の学校事情も見受けられる。作中で副校長が言っていたのは「クリスマス会」と名のついた会の禁止。学校という公的機関が特定の宗教行事を祝うことに問題があるというわけである。そう言われるとその通りであるが、小学生が宗教についてどの程度の認識を持っているだろうか。私は「クリスマス会」であろうと、ベーシックに「お楽しみ会」であろうと名称は何でも構わないが、このような会は子どもが主体となってやるものであるから、子どもたちが楽しめるなら変にこだわらなくてよいのではないかと思う。

最後に、正直に言うと私が家に帰ってきてからパソコンに向かって時間は、机に向かって時間よりも遙かに長い。その時間の大半はインターネットをしている。改めて言うのも違和感があるが、インターネットには膨大な情報が溢れている。更にその信憑性も難しいところであり、しばしばレポート等への利用にははばかれることがあるだろう。しかし今回、私はインターネットで本意に出会った情報(この場合『だいじょうぶ3組』という本の存在)が、現在の自分にとって考えさせられる、有益なものだったという面白い体験をすることができた。このことは、本との出会いであるし、また、赤尾先生という1人の先生との出会いでもあるのではないかと思う。今はまだ、赤尾先生の斬新な意見に流されている部分が少なからずあると自覚している。それを踏まえて、また、せっかくこうして出会った本だからこそ、卒業が近くなった頃にでももう一度読もうと思う。次に読んだ時、今より多くを学んで成長しているであろう自分は、この本から今度は何を、どのように感じ取るのだろうか。

『だいじょうぶ3組』乙武洋匡著、講談社、2010

(すぎやま ありさ・釧路校1年)

図書館活性化 プロジェクト

学生選書ツアー（札幌館・釧路館）

学生の視点を蔵書に取り入れる

利用者の必要な資料を的確に収集し提供することは図書館の基本的なサービスです。当館ではこれまでシラバス掲載の参考文献を揃えたり、授業に関連した図書を教員に推薦してもらう等して学生用図書の収集に力を入れてきました。

これに対して学生選書ツアーは、学生が自分の学習に必要な図書を自分自身で選ぶという企画で、学生の視点を蔵書に取り入れることを目的としています。

学生が選んだ図書はよく利用されている

参加者の中には、自分に必要なものだけでなく、図書館に置いて他の学生にも読んでほしいという理由で選んでいる学生もいて、かなり真面目に選書しているという印象です。学生目線で選ばれた本は他に比べて貸出が多くよく利用されています。

札幌館・ゼミ選書ツアー

学生選書ツアー実施3年目にあたって、今年は教員に協力を依頼し、ゼミ単位による選書ツアーの開催を試みました。おかげで5回の実施で参加者が40名、選んだ本が196冊と昨年と比べて格段に増え、より多くの学生に参加してもらうことができました。選書自体も教員の指導を受けてどんな本を選ぶか下調べをしたうえで、店頭で中身を確認している学生もあり、ゼミや自分の研究テーマに関連した本を探すことができたようでした。

釧路館・選書ツアー

釧路館では昨年に引き続き、学生・院生の皆さんが書店に行って、図書館に置いてほしい本や読みたい本を手にとって選ぶ学生選書ツアーを実施しました。

13名の参加者が楽しい雰囲気の中、昨年から参加している方、今回初めて参加の方ともに、真剣に約100冊の本を選んでいました。レポートや卒業論文の参考になりそうな本、教育実習やフィールド研究、教員になったときに役立ちそうな本、楽しい小説の本や絵本等を選びました。

授業などの都合で今回参加できなかった方も、次回このような企画がありましたら、ご参加をお待ちしています。



書店で手に取りながら本を選ぶ（釧路館）



選定した図書の館内展示（釧路館）



学生作成ポップ（札幌館）

図書館活性化
プロジェクト

札幌館「読書指導の達人講座」

企画への思い

そもそも、本でコミュニケーション出来るイベントを図書館でやってみたいと心に秘め、教員養成大学の図書館らしい内容を探していたところに、ひらめいたのが、「ブックトーク」、「アニメーション」及び「ストーリーテリング」という読書指導に係る実践領域でした。さて、ブックトークってどうやるの？アニメーションって何だろう？大学の授業では実技として体験できる授業は開講されておらず、けれども、実際に小中学校の現場では「読書指導」として取り入れられているらしい技術です。どんなことするのか～見てみたい～、見せてあげたいな。

講師さがしに難航

教師を目指す学生さんたちのために、これは実現させなくては！と思いながら、計画書と実施要項を作成してはみましたが…講師をしていただける方を探すのには難航を極め…。やっとご紹介頂いた候補の方からスケジュールが合わないとの返答にはさすがに凹みました…が、本学には現場の先生たちに太い人脈があるM先生がいらしたのです！やったー！叩けよさらば開かれん、笑う門には福来たる？？ということで、これ以上ないという読書指導の見識及び経験豊かな小学校教諭の方々のご協力を得ることができ、開催の運びとなりました。

「読書指導の達人講座」

①11月25日 (木) 16:30～18:00

- 「読書指導」とは？
- 「読み聞かせ」のこつ

②12月1日 (水) 16:30～18:00

- だれでもできるブックトーク

③12月8日 (水) 16:30～18:00

- 子どもが夢中になるアニメーション

④12月16日 (木) 16:30～18:00

- ストーリーテリングの魅力

【場所】グループ視聴覚室 (札幌館3F)

【担当講師】

- ・手稲宮丘小学校 校長 中橋 理子氏
- ・小野幌小学校 教諭 山田 佳子氏
- ・北小学校 教諭 太田 沙絵氏

第1回目「読書指導とは？読み聞かせのこつ」



かわいいペーパーサート

第2回目「だれでもできるブックトーク」



各自で選んだ本を持ち寄って打合せの真っ最中。



グループ毎にブックトークの発表。

第3回目「子どもが夢中になるアニメーション」

教材は4年生教科書の「ごんぎつね」。「挿絵バラバラ事件」は皆さん上手に元どおりに繋げることができました。



グループ毎に様々なダウトが入ります。みんなだまされたり、見破られたり。

第4回目「ストーリーテリングの魅力」

中橋先生が手に持った紙を折り畳んでのストーリーテリング



みんなもやってみよう！二人一組でお話しテキストから好きなものを選んで…

短い準備時間でも、驚くほど個性豊かなストーリーテリングが続々登場！



講座を終えて

子どもに自信を持って薦められる本を知りたい！読書指導のスキルアップを図りたい！学校現場ではどんな読書指導をしているのかな？みなさんの読書指導に関するギモン？？？を解き明かす使命を持って…などとはおそれおおい。90分計4回の講座は毎回、楽しくなければ読書指導じゃない！とばかりに大いに盛り上がりました。

子どものように読み聞かせを大いに楽しみ、かわいいペープサートに喜んで、お互いのブックトークの発表にわくわくして、アニメーションでダウトを探し、ストーリーテリングに眼を輝かせました。回を追うごとに参加学生さんたちがリラックスし楽しんでいる様子。

ありがたいことに、延べ約60人の参加人数をもって好評のうち終了し、このような企画をまた設けてほしい、子ども達の前でもやってみたいとの声も多く聞かせていただきました。毎回最後にコーヒーとお菓子のサービス付きというおまけもあって、これが一番好評だった？なんていうのは秘密ですけどね。

文責 杵淵久美子・学術情報室

図書館活性化 プロジェクト

ブックカフェ in ASAHIKAWA

ブックカフェとは…

活字離れと言われる今、本をより身近なものとして親しんでもらうため、カフェ形式で本についての講演や、各種イベントを行なうという試みです。

今回、図書館活性化プロジェクトの一環として、学生ホールの一角を使って本に親しんでもらうきっかけになるようなイベントができないかと思い企画しました。



プロジェクト立ち上げ～当日まで

プロジェクトが正式にスタートしたのが10月。これから半年の間に2回のイベントを開催しなければならない非常にタイトなスケジュールでした。

また、「ブックカフェ」とは決まったものの、「サイエンスカフェ」で経験のある和田先生以外は、担当者や図書委員の先生方も具体的なイメージがつかめず、不安の中でのスタートとなりました。

とりあえず第1回は和田先生がナビゲーターとなり、火山の魅力と関連書籍の紹介をしようと決定。本格的な準備がスタートしました。

第1回ブックカフェスタート

イベントの当日がやってきました。会場の準備も整いました。カフェに見えるでしょうか？



いよいよイベントがスタート。まずはスライドで世界のいろいろな火山を紹介します。



次は「ポケットブックを作ってみよう」。地学の学生さんの指導のもと、紙を折っていきます。完成!!



続いてはおすすめ本の紹介。先生や学生さんによるお気に入りの場面の朗読もありました。



第1回ブックカフェ無事終了!!

第1回ブックカフェ「世界の自然を読み解く～火山で知る地球の姿～」

【企画・ナビゲーター】

和田 恵治 (地学)

【企画】

佐々木 周 (哲学)

【ポスター制作】

込山 希 (美術4年)

【企画・事務】

杉本 恵子 (旭川館)



◎感想と課題

「ブックカフェ」という試み、学生主催という試み、どちらも初めてのチャレンジ企画でしたが、今後の展開に期待の持てるポテンシャルのある企画だと感じました。課題はやはり、時間帯設定の難しさ。昼休みに設定するのなら、昼食の持ちこみを許可するなどの工夫が必要になりそうです。

第1回ブックカフェは2010.11.25(木)に開催しました。

第2回目は学生企画

第2回目のイベントは「学生企画」ということで、第1回目のイベントと同時進行で準備を始めました。一番大変だったのは学生スタッフを集めること。図書館で募集をかけましたが集まらず、結局先生に協力していただいて3年生の加藤さんと工藤さん、2年生の来栖さんの3名と前回に引き続きポスター制作をお願いする込山さんの計4名で企画会議をスタートさせました。

打ち合わせの中で、本を読まない学生さんが多いという話になり、そういう人にも楽しんでもらえるようなものをするということで、「ブックトーク・テレビやドラマの原作本」「朗読コンテスト」「オリジナルしおりを作ってみよう」の3つの企画を考えました。

学生さんが忙しく、なかなか打ち合わせの時間がとれない中、本番二日前にようやくリハーサルまでこぎつけました。あとは本番を残すのみです。

ハマる!! しおり作り

第2回ブックカフェはMC担当の来栖さんの開会あいさつから。飲み物タイムをとってもらった後、「ブックトーク」が始まりました。



スライドを使って工藤さんと加藤さんが、本を紹介します。会場には図書館にあるその他の原作本も展示。

続いてはお待ちかね「朗読コンテスト」。朗読するのは小説から新聞や憲法条文までさまざま。くじ引きで決定します。



エントリーは5名。会場の採点により優勝者が決定します。

そして優勝したのは、飛び入りで参加してくれた田中さん。「ロミオとジュリエット」を感情豊かに朗読して、会場大喝采。

続いての企画は「オリジナルしおりを作ろう」。色画用紙の台紙に絵を描いたり、シールやマスキングテープを使って自分だけのしおりを作ってもらいます。

実際に始めてみるとしおり作りにハマる人が続出。



こうして第2回ブックカフェは盛況のうちに終了しました。来場者の皆さん、ありがとうございました。

第2回ブックカフェ 「《学生企画》ちょっと寄っていきませんか？」

【企画・運営】

加藤 亜弓 (社会3年)

工藤 拓海 (社会3年)

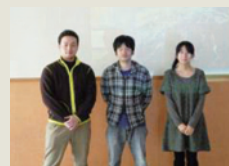
来栖 祥太 (理科2年)

【企画・ポスター制作】

込山 希 (美術4年)

【企画・事務】

杉本 恵子 (旭川館)



学生スタッフの来栖さん、工藤さん、加藤さん(左から)この日のために頑張ってくれました。



かわいいしおりが完成

第2回ブックカフェは2010.11.25(木)に開催しました。

文責 杉本恵子・旭川校室学術情報グループ



図書館利用者アンケート速報

利用者アンケートの実施

附属図書館では、図書館の蔵書・学習環境等を整備し、学習支援の場としての図書館を充実させるための基礎情報を得ることを目的に、学生（学部学生・大学院生等）を対象に図書館利用者アンケート調査を1月11日から1月28日までの期間で実施しました。アンケート調査票の回収数は、全キャンパスあわせて、507件でした。

アンケート調査内容には、利用頻度、利用目的、図書館資料の充実度、図書館の建物・照明等の環境などの従来のアンケート調査の設問の他に、図書館に学習支援の場としてどのような空間を望むのか、など新たな内容の設問も設けました。今後、アンケート調査結果を分析し、学習支援の場としての図書館の充実に向けて検討する予定です。

どんな空間が望まれているか

以下に、図書館に学習支援の場として設けてほしい空間について設問とその集計結果を掲載します。

設問 図書館を学習支援の場として多目的に利用するために館内の空間を分けることを検討しています。あなたが図書館内に設けてほしい空間について3つまで選んでください。

- | | |
|-----------------|--------------|
| ①個人ブース | ⑤展示・企画スペース |
| ②共同学習スペース | ⑥リフレッシュ・スペース |
| ③ミーティング・セミナールーム | ⑦学習支援コーナー |
| ④パソコンコーナー | ⑧その他 |

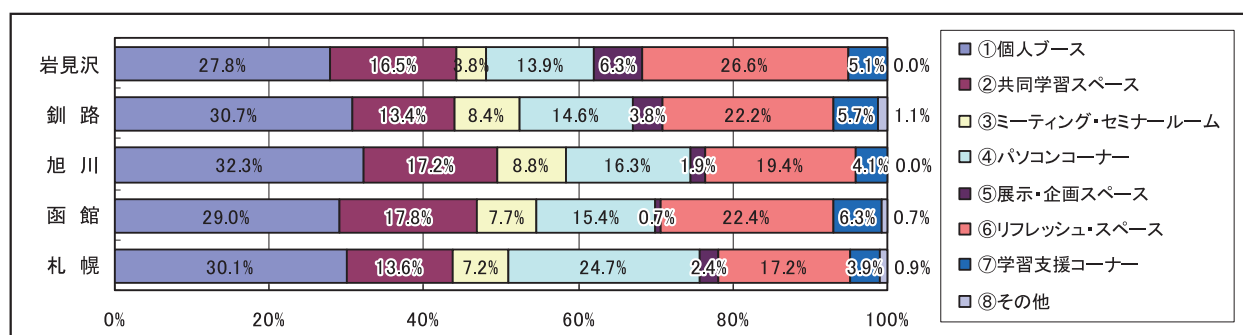
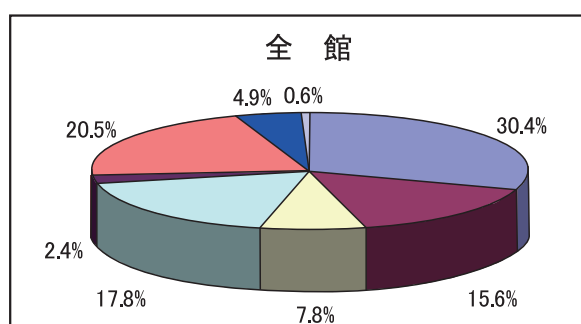
各キャンパスとも、個人ブースの希望がもっとも多く全選択数の30%前後を占めていました。

次いで希望が多かった空間は、札幌を除く4キャンパスではリフレッシュ・スペースで20%前後を占めており、札幌ではパソコンコーナーが24.7%を占め次順位でした。

3番目に希望の多かった空間は、札幌ではリフレッシュ・スペースで17.2%でしたが、函館・旭川・岩見沢では共同学習スペースが15～17%程度を占め、釧路ではパソコンコーナーが14.6%でした。グループ学習室の有無により、選択数の違いが表れたものと思われます。

集計結果から、個人ブースのような静かで学習に集中できる場と、リフレッシュ・スペースのような雑談や飲食が可能なリラックスできる場という、正反対とも言える空間を希望する回答が多く、様々なスタイルで学習できる居心地のよい空間が求められていることが伺えます。

アンケートに回答された学生の皆様、アンケートを配布された教員の皆様、ご協力ありがとうございました。





図書館職員雑感 ～2010年を振り返る～

春

新入生を対象にした図書館オリエンテーションを行う。

教員等の要望にもとづき、図書館ガイダンスの中で、図書館ツアー・情報検索の説明を行う。

シラバス掲載資料を網羅的に整備していく。

新たに始めた、道内現職教員への図書を貸し出すWeb 貸出サービスの対応に追われる。

夏

新着図書・雑誌が次々に到着し、書架の狭隘化という、図書館の古くて新しい問題に直面しながらも、資料配架に追われる。

前期も終わりに近づき、閲覧席も徐々に飽和状態となる一方、ガイダンスの要望は激減する。

滞在型の図書館とはほど遠い現実には頭を悩ます。

秋

機器更新等を控え、館内のレイアウトを考え試行する。

PCコーナーに立ち寄る学生さんの姿が大勢見られる。
後期の履修登録・授業開始の時期がやって来た。

冬

卒論・修論作成のために、図書・文献の取り寄せのピークをむかえ、カウンターが慌ただしくなる。

相談などでカウンターにやってくる学生への対応をしつつも、図書館ガイダンスが効果的に機能しているのかが気になる。

2010年は電子書籍元年と呼ばれ、Kindle (アマゾン)・iPad (アップル)・GALAPAGOS (シャープ)・Reader (ソニー) といった商品が続々と発表された。

大学図書館での話題は、ラーニングコモンズだろうか…。

春の異動で札幌館のサービス担当となった。

以前の札幌館勤務では、図書の分類・目録・装備や、データ化されていない資料の遡及入力といった整理業務を主に、学内 LAN から CD-ROM を利用するための、サーバの管理・運用といったこともあわせて担当した。

図書館のサービス担当、あるいはカウンター担当といえ、一般的には図書の貸出・返却のことであるかのように思う人がいるようだが、それは業務のほんの一部にすぎない。例えばレファレンス (参考業務) は速さと正確さの両方を求められる、大事な仕事だと思う。

夏までの間に実施してきた図書館ガイダンスは、単に図書館内の資料や施設を説明しているわけではなく、レファレンスにも通じる、大学の中での図書館の位置付けや必要性を表現する意味でも大切な仕事である。

冬に受講した情報リテラシー教育担当者研修 (国立情報学研究所主催) は、「学術情報リテラシー教育に係る専門的な知識と技術を修得する」ことを目的とし、全国の大学図書館等の職員が多数参加した。

技術的なことはもちろんのこと、「ニーズの把握」や「関係者との協力」といったことの重要性を再確認するとともに、現実とのギャップに悩んだ。

『図書館職員の倫理綱領』の中でも、「図書館員は個人的、集团的に、不断の研修につとめる。」や「図書館員は、相互の協力を密にして、集団としての専門的能力の向上につとめる。」と表現されている。

日々精進していくことは、「図書館員は、社会の期待と利用者の要求を基本的なよりどころとして職務を遂行する。」に通じる大切なことだとつくづく思った。

図書館を取り巻く社会の変化に順応していくためには、資料・施設、そして人という図書館を構成する三大要素の整備は必須である。

インドの図書館学者ランガナタンが唱えた、『図書館学の五原則』の中の一つにこうある。

「図書館は成長する有機体である。」

いつか良いかたちで『司書は振り返る』となるためにも、あらためて、心せねばと思う。

文責 穴水光輝・学術情報室

教職員著作物受贈一覧 ～ありがとうございました～

平成23年 2月15日現在 (敬称略、五十音順)

受贈館略号 (札) 札幌館 (函) 函館館 (旭) 旭川館 (釧) 釧路館 (岩) 岩見沢館

◎生方 秀紀

- ・ESD (持続可能な開発のための教育) をつくる：地域でひらく未来への教育
生方秀紀, 神田房行, 大森享編著, ミネルヴァ書房, 2010.4, 233p (札, 函, 旭, 釧)

◎大崎 功雄

- ・近代ドイツにおける「学校システム」の定型化過程と教育方法の改革 (教育研究報告及び資料：5)
科学研究費補助金成果報告書, 基盤研究C, 2010.3, 136p 課題番号19530673
(札, 旭, 釧, 岩)

◎大津 和子

- ・グローバル時代の国際理解教育：実践と理論をつなぐ
日本国際理解教育学会編著, 明石書店, 2010.7, 264p (注) 執筆者共著 (札)

◎角 一典

- ・北海道美唄市における取り組みを中心に (北海道教育大学旭川校社会学研究室調査報告；vol.7. 冷熱エネルギーによるまちづくりの現状と課題；2)
角一典編集, 北海道教育大学旭川校社会学研究室, 2010.3, 50p (札, 旭, 釧)

◎川前 あゆみ

- ・住民自治へのコミュニティネットワーク：酪農と自然公園のまち標茶町の地域再生学習 (叢書地域をつくる学び；XV)
鈴木敏正, 玉井康之, 川前あゆみ編著, 北樹出版, 2010.4, 286p (札, 函, 旭, 釧, 岩)

◎久保 良宏

- ・数学科の指導計画作成と授業づくり (中学校新教育課程)
久保良宏・久永靖史編著, 明治図書, 2010.2, 160p (札, 函, 岩)
- ・算数・数学科教師の「数学教育に対する態度」に関する教育社会学的視座からの研究
科学研究補助金成果報告書, 基盤研究C, 2009.3, 186p 平成18年度～平成20年度課題番号18530670 研究代表者 久保良宏
(札, 旭, 釧, 岩)

◎瀬戸 健一

- ・協働性にもとづく学校カウンセリングの構築：高校における学校組織特性に着目して
瀬戸健一著, 風間書房, 2006.10, 350p (札)
- ・生徒指導のための実践テキスト：教師の実践と理論の融合を目指して
瀬戸健一著, 風間書房, 2007.9, 194p (札)
- ・協働的指導のための実践テキスト：エピソードから学ぶ生徒指導
瀬戸健一著, 風間書房, 2010.3, 189p (札)

◎小出 高義

- ・中学校体育：男女必修「武道」指導の手引き
清水晃一編集, 学研教育みらい, 2010.5, 207p (注) 執筆者共著 (旭)

◎佐々木 馨

- ・鎌倉仏教の世界
佐々木馨著, 山喜房佛書林, 2010.7, 215p
(札, 函, 旭, 釧, 岩)

◎鈴木 明彦

- ・地球は美しい：日韓環境詩選集
佐川亜紀, 権宅明編訳, 土曜美術社出版販売, 2010.1, 419p (注) 執筆者共著 (札)
- ・詩と思想詩人集 2010年
「詩と思想」編集委員会編, 土曜美術社出版販売, 2010.8, 297p (注) 執筆者共著 (札)
- ・鎮魂詩 (レクイエム) 四〇四人集
鈴木比佐雄 [ほか] 編, コールサック社, 2010.8, 635p (注) 執筆者共著 (札)
- ・北方抒情：亜寒帯の詩と思想 (現代詩論文庫；3)
若宮明彦著, 書肆青樹社, 2010.11, 145p (注) 執筆者共著 (札)

◎玉井 康之

- ・コミュニティ教育論 (放送大学大学院教材；8920532-1-1011. 人間発達科学プログラム)
岡崎友典, 玉井康之著, 日本放送出版協会, 2010.3, 254p (札, 函, 旭, 釧, 岩)

◎辻井 義昭

- ・書・辻井京雲作品集：1965～2010
辻井京雲の書業48年の歩み実行委員会編, 書道研究 書園, 2010.5, 167p (札)

◎馬場 俊臣

- ・現代日本語接続詞研究：文献目録・概要及び研究概観
馬場俊臣編著，おうふう，2010.11，428p (札)

◎林 義明

- ・続・あのねのうそ八百 (上下2冊)
林義明編・著，あいわプリント(印刷)，2010.7 (旭)

◎氷見山 幸夫

- ・Land Use/Cover Changes in Selected Regions in the World : Volume I to IV combined edition (International Geographical Commission on Land Use/Cover Change IGU-LUCC Research Reports)
EDITORS : Yukio Himiyama, Alexander Mather, Ivan Bicik, Elena V.Milanova, Issued by IGU-LUCC, 2010.3, p.262 (注) 執筆者共著 (札，旭)
- ・Glocal Environmental Education
Edited by Yukio Himiyama, R.B. Singh, Fusayuki Kanda and James Hindson, Rawat Publications, c2010, p.246 (注) 執筆者共著 (札，旭)

◎前田 賢次

- ・山下國幸初期教育実践資料集 (戦後日本における教育実践の展開過程に関する総合的調査研究；3)
科学研究補助金成果報告書，基盤研究B，2010.3，401p 2007年～2009年度課題番号19330195 研究代表者：臼井嘉一 (注) 研究分担者 (旭)
- ・全国青年教師連絡協議会関係資料 (戦後日本における教育実践の展開過程に関する総合的調査研究4)

科学研究補助金成果報告書，基盤研究B，2010.3，420p 2007年～2009年度課題番号19330195 研究代表者：臼井嘉一 (注) 研究分担者 (旭)

- ・論文集 (戦後日本における教育実践の展開過程に関する総合的調査研究；7)
科学研究補助金成果報告書，基盤研究B，2010.3，152p 2007年～2009年度課題番号19330195 研究代表者：臼井嘉一 (注) 研究分担者 (旭)

◎三橋 功一

- ・豊かな人間性を育てる：ゆとりと充実のある教育の創造
長井和雄編著，学陽書房，1980.8，305p (注) 執筆者共著 (札)
- ・効果的な教職科目の教育内容・方法の在り方：「教育の方法及び技術」：平成10・11年度教職課程における教育内容・方法の開発研究東北地区教育実践等研究センター協議会教育方法研究会編集；研究代表者寺井謙次 (秋田大学教育文化学部)，秋田大学教育文化学部教育実践研究指導センター，2000.3，178p (注) 執筆者共著 (札)

◎初岡 宏成

- ・ブラウン判決の遺産：アメリカ公民権運動と教育制度の歴史
ジェイムズ・パターソン著；初岡宏成訳，慶應義塾大学出版会，2010.3，331p (札，旭，釧)

◎百瀬 響

- ・文明開化：失われた風俗 (歴史文化ライブラリー：261)
百瀬響著，吉川弘文館，2008.9，211p (岩)



LIBRARY NEWS

附属図書館からのお知らせ

自動貸出返却装置・入館管理システムの利用について

利用者サービスとセキュリティの向上を図るため、自動貸出返却装置と入館管理システムを全館に導入しました。



■自動貸出返却装置は、利用者自身で図書の貸出手続き等をするためのもので、この導入によって、図書館をより便利にご利用いただけるようになりました。使い方がわからないときはカウンター職員にお尋ねください。

■入館管理システムは、館内のセキュリティの向上を図るために導入したもので、入館の際に学生証または図書館利用証による認証が必要となります。学生証等をお忘れになった方、あるいはお持ちでない方はカウンター職員にお申し出ください。

〈入館方法〉

入館ゲートの読取装置で、「学生証」または「図書館利用証」を読み取らせ、ゲートが開いたら、入館してください。



全館共通

図書館利用ガイダンス・情報検索講習会

附属図書館では、オンラインで利用できる電子情報を提供しています。これらは、通常の本とは違い、図書館に来て書架を探しても見つからない情報です。ですが、利用方法さえ知っていれば、レポート・論文作成に役立つ文献を効率よく入手することができます。

例えば、朝日新聞データベース「聞蔵」には明治12年以降1,200万件以上の記事が収録され、パソコンですぐに読めるようになっています。

図書館では、これらの電子情報を有効に活用して、よりの確な情報を得ることができるように、学生を対象としたガイダンスを実施しています。ぜひご参加ください。

教員のみなさまへ

情報機器操作等の1年生向け授業や上級生対象のゼミに図書館利用法・情報検索ガイダンスを取り入れませんか。詳しくは各館カウンターにお問い合わせください。

構成館 Topics

札幌館

2階閲覧室の整備を行い、児童書コーナーの拡張および参考図書コーナーへの座席の用意、雑誌閲覧コーナーを設置しました。

函館館

絵本コーナーに外国語の絵本が入りました。日本語の絵本を他の国の言葉に翻訳した絵本や、英語はもちろんフランス語・韓国語など外国語絵本、また、ページをめくるだけでも楽しめる絵本もありますので、どうぞ手にとってご覧ください。

旭川館

入館管理システム導入に伴い、開架2Fのレイアウトが大幅に変わりました。配架場所など不明な点があればお気軽にカウンターまでお尋ねください。

釧路館

3階にて、児童図書コーナーを新設しましたのでどうぞご利用ください。